

# 海外食料需給レポート

(2019年5月)

令和元年6月18日

農林水産省

# 海外食料需給レポートについて

## 1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(米、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

## 2 対象者

このレポートは、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

## 3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

## 4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

## 5 本レポートに記載のない情報は以下を参照願います。

### (1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

### (2) 農林水産関係機関の情報 (ALIC の情報サイト)：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

### (3) その他海外の機関 (英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関 (FAO)：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会 (IGC)：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構 (OECD) (農業分野)：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム (AMIS)：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省 (USDA)：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社 (CONAB)：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省 (AAFC)：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局 (ABARES)：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

# 目 次

## 概要編

I	2019年5月の主な動き	1
II	2019年5月の穀物等の国際価格の動向	2
II	2019/20年度の穀物需給（予測）のポイント	2
III	2019/20年度の油糧種子需給（予測）のポイント	2
V	今月の注目情報	
	米国の2019/20年度のとうもろこしの作付け動向	3
(資料)		
1	穀物等の国際価格の動向	5
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	6
3	平成30年11月以降の食品小売価格の動向	7

## 品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
2	とうもろこし	5
3	米	8
II	油糧種子	
	大豆	12

## 【利用上の注意】

## (概要編)

# I 2019年5月の主な動き

## 1 中国の在庫の世界に占める割合

米国農務省は、本年5月の穀物等需給報告から、中国を除いた世界の在庫数量の公表を開始した。中国は、穀物について世界の約2/3の在庫を保有しているとみられるが、この在庫は基本的には中国国内向けに供給され、国際市場に流通することはほとんどない。このため、本データは、国際市場に流通する穀物の状況を的確に把握するために活用できる。

(単位:百万トン、%)

2019/20	世界の期末在庫		うち中国分	中国を除いた世界分	
	在庫数量	在庫率	在庫数量	在庫数量	在庫率
小麦	293	38.8	146	147	<b>23.4</b>
とうもろこし	315	27.6	192	123	<b>14.3</b>
大豆	113	31.8	22	91	<b>36.0</b>

注: 期末在庫率は期末在庫量/消費量で計算

2019/20年度の中国を除いた世界の期末在庫率は、小麦が23.4%、とうもろこしが14.3%、大豆が36.0%となる見込み。

現在の期末在庫率の水準は、近年、需給の逼迫により期末在庫が減少した局面（欧州や豪州の干ばつで2007/08年度に小麦の在庫率が17.5%、米国の干ばつで2012/13年度に、とうもろこしが同9.5%、大豆が同24.2%）と比べ、高い水準にあることがわかる。

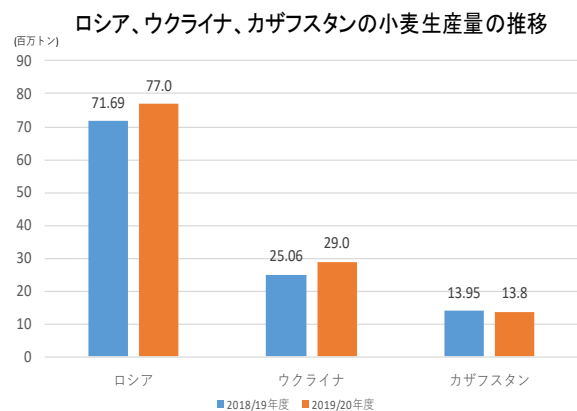
## 2 2019/20年度の旧ソ連地域の小麦の需給動向と生育状況

本年5月に公表された米国農務省需給報告によれば、旧ソ連12ヶ国の2019/20年度の生産量は、前年度より10.2百万トン(8.5%)増加し、135.3百万トンと、世界の小麦生産量の16.7%を占める見通し。

このうち、主要生産国であるロシア、ウクライナ、カザフスタンの生産量は、カザフスタンで減少するものの、ロシア、ウクライナで増加することから、3ヶ国合計で生産量は前年度より9.1百万トン増加し、119.8百万トン(旧ソ連12ヶ国の92.5%、世界の15.4%)と予想されている。なお、カザフスタンでは、生産の多様化を図るために小麦から大麦、とうもろこし等への転換が進められている。

2019/20年度の小麦生産量は、ロシアが世界第4位(世界の9.9%)、ウクライナが第7位(同3.7%)。また、小麦輸出量はロシアが世界第1位(同19.5%)、ウクライナが第5位(同10.3%)と、世界の小麦生産等における旧ソ連諸国の存在が高まっている。

なお、ロシア、ウクライナにおける今期の冬小麦の生育は、冬枯れの被害もほとんどなく、順調である。また、5月末現在、ロシア、ウクライナ、カザフスタンにおける春小麦の作付けは終盤を迎えている。



資料: 米国農務省のデータを農林水産省で加工。

## II 2019年5月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、4月下旬、150ドル/トン台半ばで推移。5月上旬、米国農務省需給報告で世界の潤沢な供給が示され、一時150ドル/トン台前半に値を下げたものの、5月中旬以降、米国産地での降雨による冬小麦の品質及び単収の悪化懸念や春小麦の作付け遅延懸念から値を上げ、5月下旬現在、180ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、4月下旬、130ドル/トン台後半で推移。5月上旬、米国産地での降雨による作付け遅延懸念や大豆への作付け転換の見込みから140ドル/トン台前半まで上昇。5月半ばに、天候回復による作付けの進展が見込まれ、一時130ドル/トン台半ばに値を下げたものの、5月半ば以降、再び米国産地での降雨による作付け遅延への懸念から値を上げ、5月下旬現在、170ドル/トン台前半で推移。

米は、4月下旬、420ドル/トン台前半で推移。その後、5月中旬に主にタイバーツ高の影響で430ドル/トン前後まで上昇したものの、より安価なベトナム産の新米が国際市場に出回ったことから値を下げ、5月下旬現在、420ドル/トン台前半で推移。

大豆は、4月下旬、300ドル/トン台後半で推移。5月上旬、米国農務省需給報告での2018/19年度の米国産輸出減少見込みから、一時290ドル/トン前後まで値を下げた。その後、降雨による米国の作付け遅延への懸念から値を上げ、5月下旬現在、320ドル/トン台半ばで推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場、米はタイ国家貿易委員会価格

## III 2019/20年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より0.8億トン増加し27.0億トンとなり、消費量の26.9億トンを上回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を0.1ポイント下回り30.1%となった（資料2参照）。  
(注：数値は5月の米国農務省需給報告による)

生産量は、前年度と比較して、米が減少するものの、小麦、とうもろこしが増加するため、前年度をわずかに上回り27.0億トンの見込み。

消費量は、小麦、とうもろこし、米がともに増加するため、世界全体では前年度を上回る26.9億トンの見込み。

貿易量は、小麦、とうもろこし、米がともに増加し、4.4億トンと前年度を上回る見込み。

期末在庫量は、8.1億トンと前年度に比べ増加するものの、期末在庫率は30.1%と前年度(30.2%)に比べわずかに低下する見込み。

## IV 2019/20年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度から0.03億トン減少して5.98億トン。消費量は前年度より1.2億トン増加して5.96億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

一方、期末在庫率は前年度より0.5ポイント低下し、21.9%となる見込み。

(注：数値は5月の米国農務省需給報告による)

## V 今月の注目情報：米国の2019/20年度のとうもろこしの作付け動向

米国農務省 (USDA) の「Crop progress」によれば、特に5月以降、米国のとうもろこし主産地において降雨過多の状況が続いたことにより、6月9日時点で作付けの進捗率は83% (過去5年平均99%) と遅れている。今後の見通しを含め、現時点での状況についてまとめた。

### 1 とうもろこしの作付状況

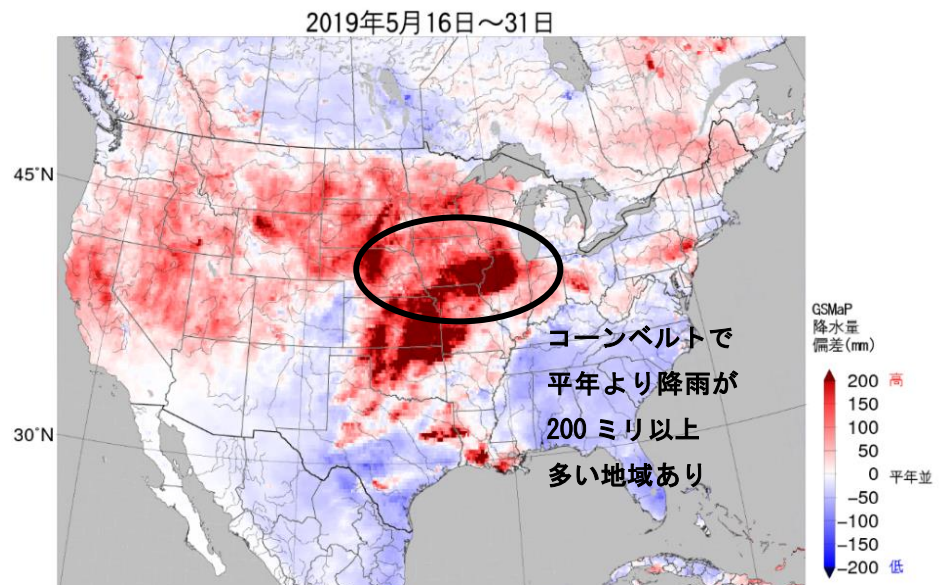
米国中西部では、3月後半から雨がちな天候となり、特に5月後半、コーンベルトの一部では降水量が平年より200ミリ以上となった (図1)。

米国農務省 (USDA) の「Crop progress」によれば、本年6月9日時点の全米主要18州のとうもろこしの作付け進捗率は83%と過去5年平均(99%)より遅れている (図2)。

特に、コーンベルト東部主要産地のとうもろこしの作付け進捗率は、イリノイ州73%、インディアナ州67%、オハイオ州50%と遅れが目立つ。

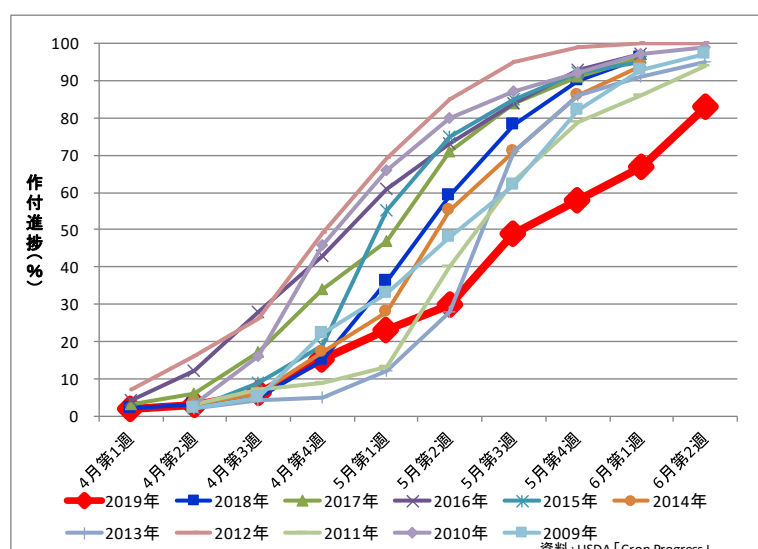
このため、一部の農業者では、とうもろこしから生育期間の短い大豆に切り替える可能性もあるが、切り替えには新たな大豆種子の手配が必要となることや、とうもろこしは、大豆と異なり、収穫が11月にずれ込んでも霜害の影響を受けないことから、引き続きとうもろこしの作付けを進める農業者もあるとみられる。

図1 米国の5月後半の降雨の平年差



1: 出典：JAXA JASMAI データ (2019年5月)

図2 米国のとうもろこしの作付け進捗の比較

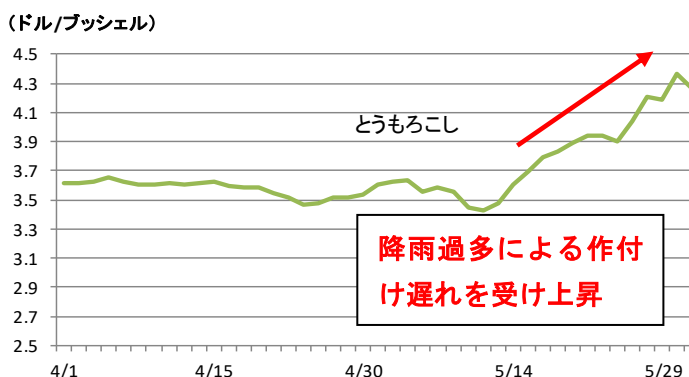


## 2 相場の動向

3月に公表されたUSDAの「作付意向面積調査」で、米国におけるとうもろこしの作付面積は増加し、大豆を上回る見通しであったことなどから、4月のとうもろこしのシカゴ相場は3ドル台後半で安定的に推移してきた。

しかしながら、5月中旬以降、コーンベルトでの降雨過多による作付け遅れが顕著になるにつれ、4ドル台前半まで上昇した（図3）。

図3 最近のとうもろこし価格の推移(シカゴ相場期近物)



## 3 過去との比較

### (1) 作付けが遅れた 2009/10 年度

過去10年間において、本年度を除き最も作付けが遅れたのが2009/10年度である。同年度においては、降雨過多により、5月末時点のとうもろこしの作付け進捗率が82%であった。

2009/10年度は、その後、6月上旬に入り作付けが完了したが、収穫も降雨で遅れ、雪の中、クリスマスまで収穫が行われていた。

しかしながら、同年度の生産量は3億3,200万トン、単収は10.32トン/ヘクタールと当時の過去最高を更新した。

表1 とうもろこしの5月末の作付け進捗率、生産量、単収の推移

(単位: %, 百万t, t/ha)

年度	調査時点	とうもろこし		
		進捗率	生産量	単収
2009/10	5月24日	82	332	10.32
2010/11	23日	93	316	9.58
2011/12	29日	86	313	9.22
2012/13	27日	完了	273	7.73
2013/14	26日	86	351	9.93
2014/15	25日	88	361	10.73
2015/16	24日	92	346	10.57
2016/17	29日	94	385	10.96
2017/18	28日	91	371	11.08
2018/19	26日	90	366	11.07
2019/20	6月9日	83	382	11.05

出典: 米国農務省「Crop Progress」、「PS&D」

注: 2019年の生産量、単収は5月時点

### (2) 需給が逼迫した 2012/13 年度

逆に、2012/13年度は、好天に恵まれ、5月末時点でとうもろこしの作付けが完了した。その後、受粉期を迎えた7月以降、50年ぶりとも言われた大干ばつとなり、高温乾燥の被害を受けたとうもろこしの生産量は3億トンを下回り、単収は7.73トン/ヘクタールで平年の8割以下と過去10年間で最低の水準となり、シカゴのとうもろこし相場は8ドル台と過去最高を記録した。

## 4 まとめ

引き続き、米国の降雨の状況やとうもろこしの作付・生育の進捗を把握していくことが重要である。

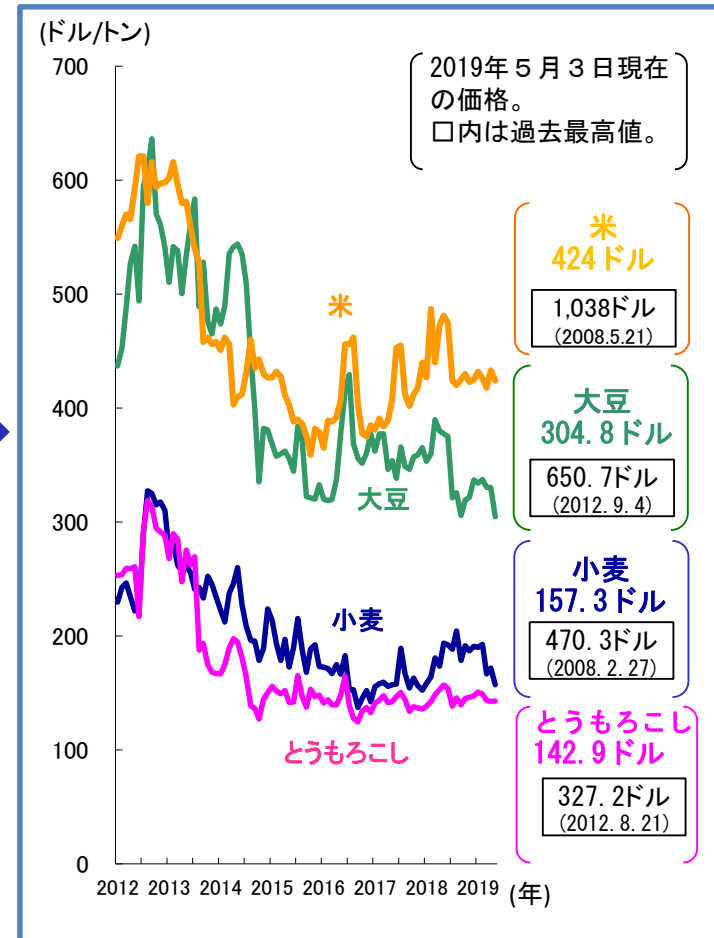
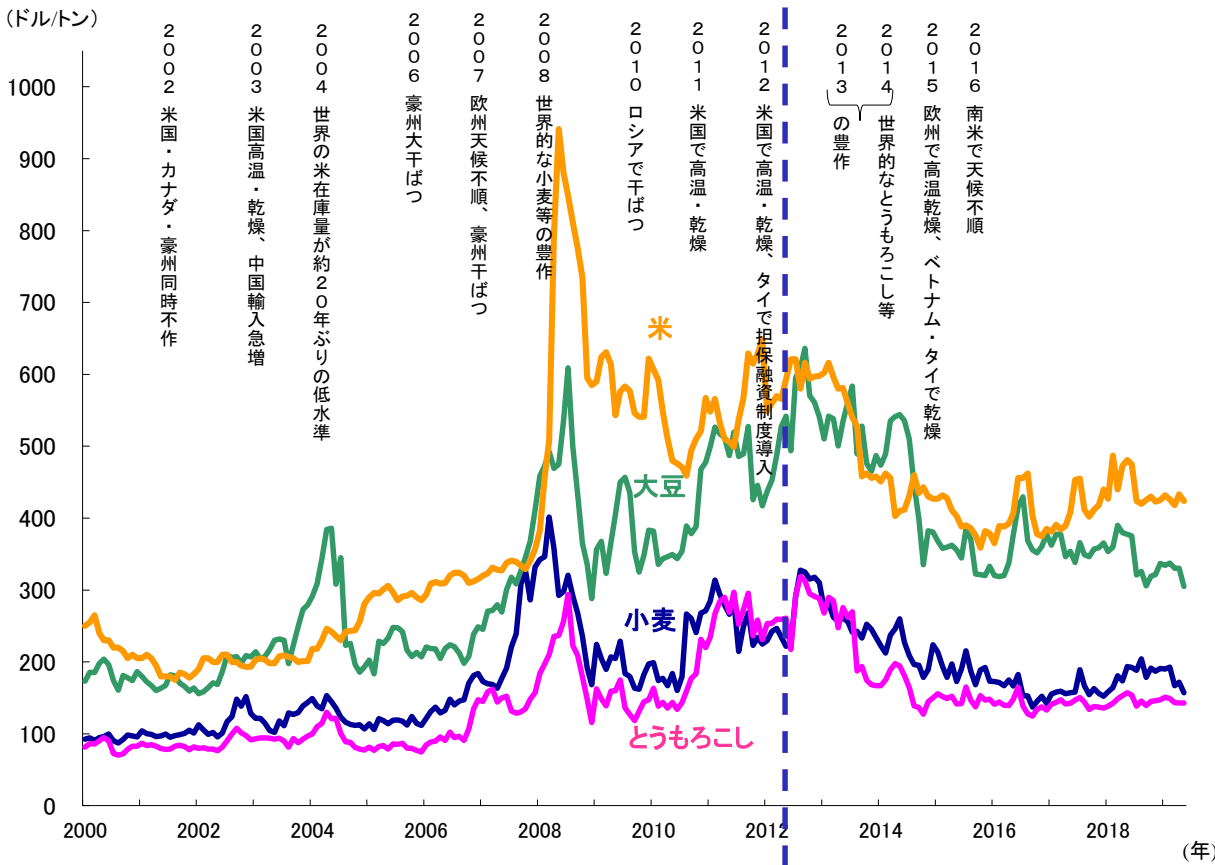
なお、過去の実績からみると、作付けが遅れても必ず不作になるとは限らないため、大きく生産量を左右する7月以降の受粉期にかけての天候と価格動向も含めて冷静な状況分析が必要となる。



# 資料1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な小麦やとうもろこしの豊作、大豆の南米での増産や米国での豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降横ばいで推移。米はタイの在庫放出等から低下したが、2017年以降上昇傾向。  
 ○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により2008年以前を上回る水準で推移している。

## □ 穀物等の国際価格の動向



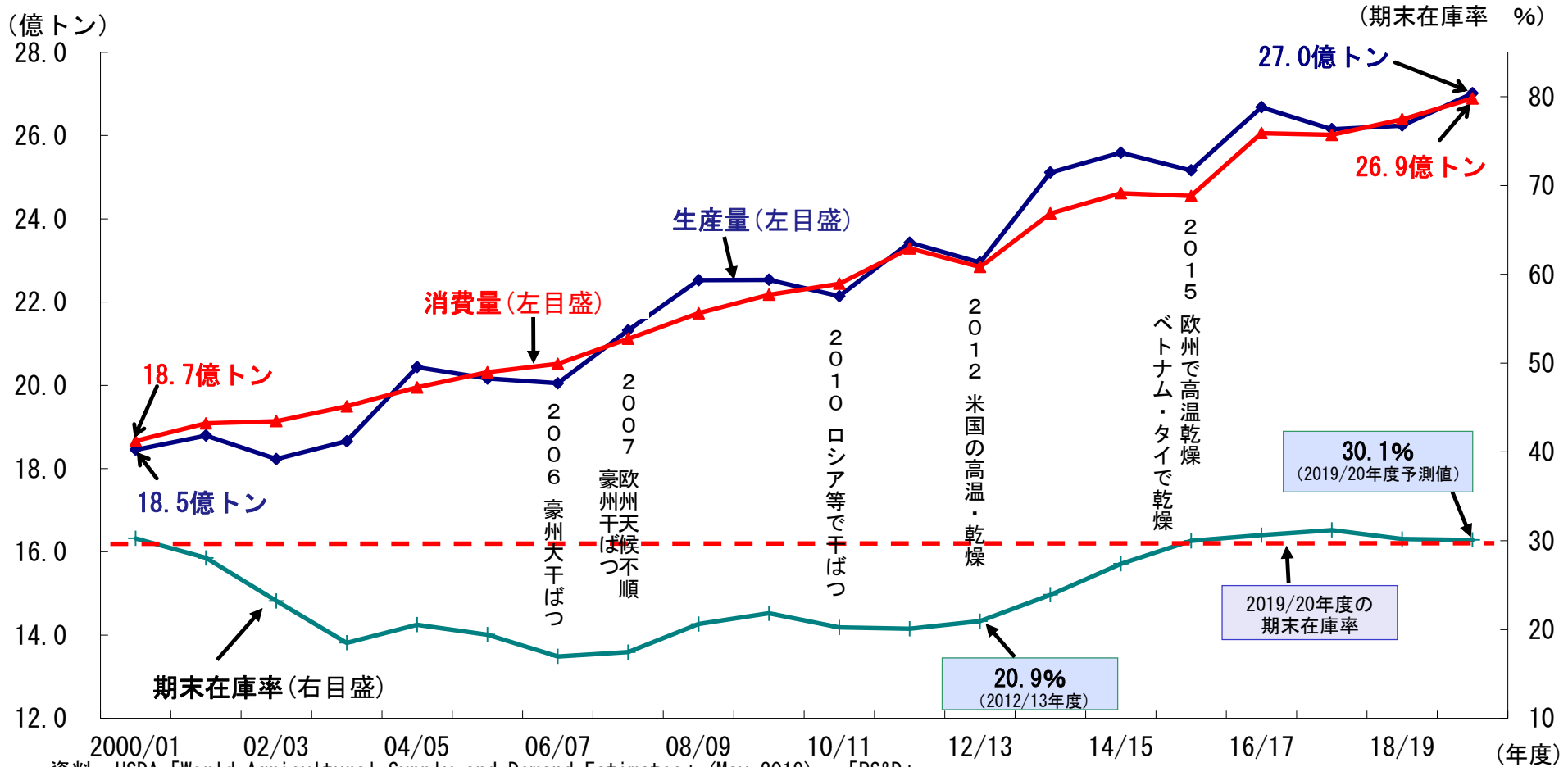
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。米は、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。(なお、2019年5月の米価格は4月30日の価格。)

注2：過去最高価格については、米はタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、米以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

## 資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2019/20年度は、2000/01年度に比べ1.4倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2019/20年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回り30.1%となり、直近の価格高騰年であった2012/13年度(20.9%)を上回る見込み。

### □ 穀物(米、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(May 2019)、「PS&D」

(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

# 資料3 平成30年11月以降の食品小売価格の動向

○ 加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

## 平成30年11月～平成31年4月の食品小売価格の動向

品目	消費者物価指数(総務省)											上昇率 (前年 同月比)
	H26	H27	H28	H29	H30	H30		H31				
生鮮食品を 除く総合	97.7	100.0	99.7	100.2	101.0	101.6	101.4	101.2	101.3	101.5	101.8	0.9%
食パン	98.5	100.0	101.1	100.9	101.4	102.5	102.6	102.4	102.5	102.4	102.0	1.0%
即席めん	94.2	100.0	100.0	99.5	99.0	99.0	98.7	98.1	99.1	99.0	98.9	-1.2%
豆腐	98.0	100.0	100.0	100.5	100.7	100.8	100.8	100.4	100.6	101.0	100.6	-0.1%
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	97.8	94.5	93.3	93.2	92.1	92.8	93.3	92.6	93.4	0.0%
みそ	100.6	100.0	99.4	99.1	99.6	99.3	99.7	100.9	100.4	100.9	101.5	2.0%
チーズ	97.9	100.0	99.3	98.8	102.6	103.7	102.5	103.9	103.2	102.6	103.8	3.4%
バター	95.0	100.0	101.5	101.7	102.0	102.2	102.5	102.3	101.8	102.3	102.5	0.6%
マヨネーズ	103.5	100.0	98.1	96.7	95.3	95.8	94.6	95.5	95.5	94.9	96.5	1.3%

資料: 総務省消費者物価指数

注1: 平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

## 【参考】平成30年12月～令和元年5月の食品小売価格の動向

品目	食品価格動向調査(農林水産省)										R元		
	H26	H27	H28	H29	H30	H30	H31				5月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.3	101.7	102.6	101.3	102.3	106.0	105.4	105.4	105.6	105.1	105.8	0.7%	—
即席めん	109.1	117.0	116.7	116.5	117.0	119.2	119.2	119.2	119.2	118.5	118.5	0.0%	—
豆腐	101.9	101.6	98.4	97.2	96.9	97.9	97.9	97.9	97.5	97.1	98.3	1.2%	—
食用油 (キャノーラ油)	91.2	88.7	85.2	84.0	85.3	89.7	90.8	88.6	88.9	90.2	89.7	-0.6%	—
みそ	119.7	121.0	120.8	122.9	130.5	135.9	135.1	135.1	133.4	134.8	134.0	-0.6%	—
チーズ	125.4	129.4	129.4	129.0	134.7	140.3	139.6	138.3	138.3	138.9	131.5	-5.3%	—
バター	112.0	118.4	120.0	120.7	121.2	121.4	121.4	121.4	121.4	121.4	121.9	0.4%	—
マヨネーズ	112.2	110.6	109.8	108.9	108.9	114.7	115.8	115.8	113.2	113.6	112.1	-1.3%	—

資料: 農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)

注1: 平成20年1月の価格を100とした指数で表記している。ただし、バターについては平成20年5月の価格を100とした指数で表記している。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で週1回実施。ただし、平成30年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: マヨネーズのH24平均値は調査を開始した平成24年10月～12月平均。

注5: 平成30年9月までの調査結果と10月以降の調査結果は、特売品の価格の調査方法が異なることから接続しないので、上昇率(前年同月比)は算出してない。